摂丹型民家の広がり－分布圏内の地域毎の同民家の分布調査から－

山崎　敏昭（ひとはく地域研究員）

はじめに

兵庫県立人と自然の博物館（ひとはく）の所在する、三田市域周辺にみられる伝統的農家の類型である「摂丹型民家」は、「妻入片土間式」とも表現される、土間と床のある空間が縦割に配置された、特徴的な民家です。

特に江戸時代の村落では特権的な装飾装置であった、「破風（屋根の端の三角部分の飾り）」を屋根の正面に見せて強調する姿（図２）は、多くの入門書に「格式をもった民家」として紹介されています。

この民家の分布圏は、かつての都であった京都周辺から丹波地域、大阪府北部の能勢地方、兵庫県南西部（※旧国の摂津国と丹波国の区域）に広がっています（図１）。

「三田市域には格式ある型式の伝統的民家が沢山残っている」、よし、それならば、摂丹型民家の分布圏各地の古い民家と見て比べてみようと、三田から丹波篠山、京都亀岡へと民家の旅をしてみました。すると、どこも同じような田園の景観と思っていたのですが、どうも茅葺屋根のある集落の景色が地域毎に違うことがわかってきました。

もちろん、建て替えで新しい家になっているとか、トタン屋根になっているとかの違いはありますが、そうではなくて、三田で見なれたような三角屋根の「摂丹型民家」の集落でのあり方が、各地方・農村で違うのです。

今回の「共生のひろば」では、どうしてこのような差があるのか、各地を歩き回って考えた結果を披露します。

こうした探求は、普段何気なくわたしたちの暮らしている田園の景色が、自然と関わり合いをもちながら、私たちの先人が伝統的な暮らしのなかで長いあいだの時を重ねながら育んできたものであるという、その歴史をひも解くことにつながると考えるからです。どうぞよろしくお願いいたします。

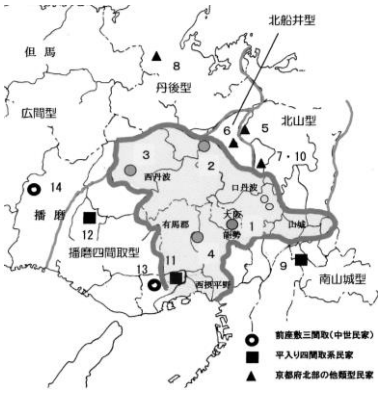

Fig.1 The area of Settan type farmhouse.：**摂丹型民家の分布圏**（播磨で新たに確認した区域を足して筆者作図）**1.旧泉家住宅　2.旧岡花家住宅　3.旧友井家住宅 4.旧東家住宅 11.内田家住宅 12.内藤家住宅 13.箱木家住宅 14.古井家住宅**

図１　摂丹型民家の分布圏と近畿の民家

Photo1.Front and HAFU of Settan type farmhouses

図２　標準的な摂丹型民家の正面の破風

（宝塚市西谷.旧東家住宅 18C※県指定文化財）

摂丹型民家の分布圏における分布調査

１）摂丹型民家の分布圏は、兵庫県南西部から、京都府丹波地方、大阪府能勢地方にまたがる広い範囲なので、調べる場所をあらかじめ決めて調べました。

２）摂丹型民家の分布圏における農村集落内にどのくらいの数の摂丹型民家が残っているのか、その所在について調査しました。チェックの対象は、摂丹型民家であるかどうかを、入口が家の妻側（三角屋根の側）にあるのか、ないのかを基準として判定しました。また、変化の様子を想定する材料としても活用するので、伝統的な茅葺の摂丹型民家のほかに、金属板などが被せられている例、瓦葺になっている例、新しい昭和以降の家だけれども入口が家の妻側にある家の有無も調べました。

３）調べた地域の白地図（市役所等で売っている 1/10,000 の白い地図）に、チェックした家について、その種類ごとに記号を決めて書き込みました。

４）こうして出来あがった集落ごとの地図を並べてその様子を見比べ、違いはどこか、同じようなところはどこか探し、その理由について考えました。

結果と考察：摂丹型民家の広がり

こうした作業の結果、興味深いことに気づきました。１）京都の亀岡市では、集落の中心部には大きな摂丹型民家が数軒ありますが、ほかの型式のお屋敷がかたまっており、やや小さな摂丹型民家の多くが集落の外側に近いところに見られます。２）大阪府の能勢地方では、1970 年代の地図には集落のそこここに散らばって摂丹型民家が見られましたが、今は建て替えが進んで探すのに苦労します。３）兵庫県の三田市では、①東部の高平地域ではトタン屋根や瓦屋根に置き換わっていますが、集落の民家のほとんどがほぼ同じような大きさの摂丹型民家となる地域がみられます。この様子は丹波篠山でも確認できます。②三田の市街地に近いところでは、ほかの型式の民家と混在しているようすがあります。４）三木市でもほとんどが摂丹型民家の集落と、ほかの型式の民家が混在する集落が見られます。ここでは村の一番奥に、ひときわ大きな摂丹型民家がポツンとあるところも見られます。

摂丹型民家は居住者の格式を表現する民家だと言われてきましたから、こうした地域毎のあり方は、ひょっとすると、ずっと昔の、それこそ江戸時代くらいのころの昔の、それぞれの地域の格式についての考え方をあらわしている可能性があるのかもしれません。例えば集落全体が同じような大きさの摂丹型民家に住む場合は、村のみんなが格式を共有していたとか、摂丹型民家が少ない場合は格式について興味がある人が少なかったとか、大小がある場合はどんな理由だろうか・・とか、伝統的な茅葺屋根もあり、瓦屋根化したものもあり、現代住宅で妻側の入り口の家がある場合の集落は、家に託された格式について、どう考えていたのだろうか・・とか、また、真似っこや模倣もあったでしょうから、いろいろ考えるとキリがなくなってきます。

おわりに・・人々の意識が農村景観を作ったのかも知れない

私たちが農村地帯の景観を読み解くとき、気候風土や自然環境や地形といった環境に従ったあり方を前提にする場合がしばしばあります。自然環境はふところが深いですから、大きな枠ではそうなのでしょうが、集落の細かい成り立ちを考えると、住む人のいろいろな考え方が村の景観を形づくったことは、当然、想定されて良いのではないかと考えます。古代の都や中世から近世の城下町、都市や町の成り立ちを考えるとき、為政者や住む人の考えが反映されて形成されているということは、当たり前のように知っているのに、農村については、それこそ明治以降の開拓地やパイロットファームといった計画農場・農村の出現まで、そうした考え方が反映されていなかったと思い込んでしまっていることに気づきました。そう言えば、以前に約２千年前の弥生時代集落について調べてみましたが、竪穴住居の配置や村の立地の仕方について、住む人たちの考え方を読みとることが出来ました。

「家の大小やあり方で、社会や文化を読み解く」・・というと、大阪府吹田の「みんぱく（国立民族学博物館）」にあるアジアやオセアニアをはじめとする世界各国の展示解説みたいですが、それは遠い国のことではなく、身近な自分たちが住んでいるところを読み解く作業につながっているということに気づく旅だったのではないかと感じています。摂丹型民家については謎が深まるばかりです。

まだまだ、探求の旅は続きます。

【参考文献、等】

永井規男「摂丹型民家の形成について」『日本建築学会論文報告集』第 251 号　P119～128　1977.01.30

多淵敏樹「兵庫県の民家と丹波の民家の特色」『平成８年度　講座「丹波学」丹波の住まいを考える』丹波の森公苑　1998.01

三田市『三田の茅葺民家』2009

山崎敏昭「見えない集落試論―弥生時代中期後半における兵庫県播磨東北・周縁部の高地性遺跡の地域類型―」『みずほ別冊２』大和弥生文化の会（奈良）2015

山崎敏昭「播磨地域にみられる摂丹型民家―摂丹型民家の分布に関する基礎研究（１）―」日本建築学会 2015 年度大会（近畿）学術講演梗概集　2015.07